

春季福音特別集会 (2) 聖霊降臨節 (京都)

聖霊の力

――コリント前後書、他――

1978年5月21日

小池辰雄

宇宙的なキリスト 南無キリスト 聖霊の真理は体験しなくては 聖霊の力が充満している福音 十字架ですつ飛ばされて無になつてしまふ 神・キリスト・我の三重の内接円 第二の宗教改革を承っている一人びとり 毎日聖書を読んで聖霊の力を受けては進んで行く 祈り

【コリント前後書】

「兄弟よ、われ曩に汝らに到りしとき、神の証を伝うるに言と智慧との優れたるを用いざりき。² イエス・キリスト及びその十字架に釘けられ給いし事のほかは、汝らの中にありて何をも知るまじと心を定めたればなり。³ 我なんじらと偕に居りし時に、弱くかつ懼れ、甚く戦けり。⁴ わが談話も、宣教も、智慧の美しき言によらずして、御霊と能力との証明によりたり。⁵ これ汝らの信仰の、人の智慧によらず、神の能力に頼らん為なり。⁶ されど我らは成人したる者の中にて智慧を語る。これ此の世の智慧にあらず、又この世の廃らんとする司たちの智慧にあらず、⁷ 我らは奥義を解きて神の智慧を語る、……¹⁰ されど我らには神これを御霊によりて顕し給えり。御霊はすべての事を究め、神の深き所まで究むればなり。……¹⁴ 性来のままなる人は神の御霊のことを受けず、彼には愚なる者と見ゆればなり。また之を悟ること能わず、御霊のことは霊によりて弁うべき者なるが故なり。」(コリント前2・1～14)

「汝ら知らずや、汝らは神の宮にして、神の御霊なんじらの中に住み給うを。」(コリント前3・16)

「¹³ 譏らるるときは勧めをなせり。我らは今に至るまで世の塵芥のごとく、万の物の垢のごとくせられたり。」(コリント前4・13)

「⁴ 賜物は殊なれども、御霊は同じ。⁵ 務は殊なれども、主は同じ。⁶ 活動は殊なれども、凡ての人のうちに凡ての活動を為したもう神は同じ。」(コリント前12・5～6)

「¹⁵ 然らば如何にすべきか、我は霊をもて祈り、また心をもて祈らん。我は霊をもて謳い、また心をもて謳わん。」(コリント前14・15)

「¹⁷ 主は即ち御霊なり、主の御霊のある所には自由あり。¹⁸ 我等はみな面帕な



くして、鏡に映るごとく主の栄光を見、栄光より栄光にすすみ、主たる御霊によりて主と同じ像に化するなり。」(コリント後3・17、18)

「この故に我ら憐憫を蒙りて此の職を受けたれば……⁴この世の神は此等の不信者の心を暗まして、神の像なるキリストの栄光の福音の光を照さざらしめたり。⁵我らは己の事を宣^のべず、ただキリスト・イエスの主たる事と、我らがイエスのために汝らの僕たる事とを宣^のぶ。⁶光、暗より照り出でよと宣^{のたま}いし神は、イエス・キリストの顔にある神の栄光を知る知識を輝かしめんために、我らの心を照し給えるなり。⁷我等この(キリストという)宝を(この)土の器に有^もてり、これ優れて大なる能力の我等より出でずして、神より(キリストより)出づることの顯れんためなり。⁸われら四方より患難を受くれども窮^{きゆう}せず、為^せん方つくれども希望を失わず、⁹責めらるれども棄てられず、倒さるれども亡びず、¹⁰常にイエスの(十字架の)死を我らの身に負う。これイエスの(復活の)生命の我らの身に(御霊において)あらわれん為なり。」(コリント後4・1、10)

「²³彼らキリストの役者なるか、われ狂える如く言う、我はなお勝れり。わが労は更におおく、獄に入れられしこと更に多く……²⁹誰か弱りて我弱らざらんや、誰か躓^{ひつ}きて我燃えざらんや。³⁰もし誇るべくは、我が弱き所につきて誇らん。」(コリント後11・23、30)

「⁸我らは真理に逆いて能力なく、真理のためには能力あり。」(コリント後13・8)

●宇宙的なキリスト

私たちの在り方というものは、量ではなくて質なんです。内村先生が「一日一生」と言われた。一日を本当にキリストに生きれば、これは一生を生きたことになる。一生をいい加減に生きれば、一日を生きていないことになるというわけです。問題はその質なんです。

パウロは、

「およそ美^うわしきこと、およそ正しきこと、およそ善きことには敬意を表せ」

と言った。私心のない人は本ものに対してはみな敬意を表する。私はだから、仏教でも何でもそこに真理のきらめきがあれば、無条件に敬意を表する。真理は神のものですから。本当に自分が無くなつてごらん。これくらい楽な力強い世界はないんです。もう何とも言えないです。大宇宙の気宇が出てくる。パウロが、

「キリストに本当に在る者は一切をもつ。全世界も汝らのものである」

なんてな言い方をしている。それは本当にそうです。クリスチャンというのはコズミックな、宇宙的な気宇のものなんです。キリストは宇宙的なキリストでありますから、どこかの教



会にどうのこうのなんて、そんなことではない。

ブルナーが『教会の誤解』という本に、

「新約聖書における教会というものはキリストの体からだのほか何ものでもない。信者たちはお互いにキリストと聖霊にあずかっているものであって、そのほかの何ものでもない。エクレシアにはキリストとその聖霊が生きていなければ、エクレシアとはいえない。エクレシアの持っているものは、何かではなくて、彼である。」

何かを持っているのではなくて、彼である、キリストである。また聖霊である。しきりにこのブルナーは、今までの教会の概念が間違っている、それをはつきりと言った。私はこの本は名著だと思っています。

「啓示の歴史の大きな救いの事実、降誕節即ち受肉、受難の金曜日即ち贖罪、復活節即ち復活、それから五旬節即ち聖霊の注ぎ。」

この四つは、なにもブルナーが言わなくなつて、その通りなんです。

その中で特にこの聖霊の注ぎということは、キリスト者にとって最も身近なことであるべきだ。聖霊のあるところにだけ教会が、エクレシアがある。そうでない所には何があってもエクレシアはない」

と。非常に断定的に愉快な言い方をしています。

ブルナーにしろ、バルトにしろ、世界の大神学者ですが、晩年において聖霊のことに非常に気がついて、

「聖霊を今まで継子扱いまごこにしていた。まことに今までの神学はその点で大きな欠陥がある」

ということをブルナーも言っている。バルトも、

「自分は使徒行伝の入り口であつて、まだ入っていない」

なんてことも言っている。

そういうわけで、皆さんは、なにもその大神学者たちを恐れるにたらないです。本当に生ける神学を、神学以上のものをあなた方は、このみ霊の世界にあれば有もっている。み霊の権威というものは自ずからそなわるものです。

●南無キリスト

使徒行伝19章。アポロというのがかなり福音について、は相当の人であつただけども、彼は福音の中にはいなかった。だから、パウロが東の方からエペソにやつて来たときに、ある弟子たちに会つて、

「²お前たちは信者となつた時に聖霊を受けたか」

と聞いた。アポロが前に来ているわけですから。

「彼等いう『いな、我らは聖霊の有あることすら聞かず』³パウロ言う『されば



何によりてバプテスマを受けしか』彼等いう『ヨハネのバプテスマなり』
4. パウロ言う『ヨハネは悔改のバプテスマを授けて、己に後れて来るもの（即ちイエス）を信すべきことを民に云えるなり』

ヨハネは先ぶれに過ぎないんだと。

5 彼等これを聞きて主イエスの名によりてバプテスマを受く。」

「キリストの名」というのは――「南無阿弥陀仏」と、これは称名ですね。それで私は

「南無キリスト」

と申しておるわけですけども――名は直ちに実（じつ）に接するわけです。「今橋君」と言えば、今橋君という実がそのまま浮いてくる。観念しているのではない。お互いにその名を呼ぶときには、その名というものはまことに直ちに――名は即ち実（じつ）なりという。ですから、キリストの名には実があるから、名に力があるといつていいわけです。聖名の力です。「聖名の力」ということと、「み霊の力」ということは、このみ霊はキリストのみ霊ですから、同じことなんです。そういうことを、どうも今までもキリスト教がすぐ概念的分析をするものだから、ダメなんです。パウロやヨハネやペテロが表現しているときは、みなその裏にこの相連（つらな）なるところの事態がある。ペテロが、

「金銀は我になし、然れど我に有るものを汝に与う、ナザレのイエス・キリス

トの名によりて歩め」

と言ったら、生まれつきの足なえが立ったでしょ。「わがうちにあるもの」というのは「キリストの名」であつた。名は実であつた、み霊であつた。まあなんとペテロは変えられてしまったんでしょうね、あの福音書のペテロと。福音書のペテロは漁師みたいな波みみたいなペテロで、浮かんだり沈んだり、わけがわからない。そして SOS なんだ。もうみ霊の来たペテロはこんなにちがう。ガラリと変わってしまう。そういうことはもはや、いわゆる「自分の信仰」なんて言っていることではない。俄然上から来るところの力が働く。

● 聖霊の真理は体験しなくては

私も大阿蘇で手島さんと祈禱した時に――なにも手島さんに按手してもらったのではない――俄然、異言の世界になって身体が躍動してしまつて、それからしびれてしまった。それは坐つてなんかいられない。私はそういう経験は三回くらいやりました。自分で、

「幸なるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」

を本当につかまえた時がそうでした。畳の上に平伏してしまつた。もうあれが鍵だった。それは体験せしめられるまでは、みんな何のかんと言っている。お気の毒なはなしです。この聖霊の真理は、これはブルンナーも言っている、

「このことは本当に体験せしめられなければ、どうにもならんことだ」

と。お釈迦さんだってそう言つた。



「八万四千の法を説いたって、一つも説かなかった。お前たちが体験するまでは、この法の世界は本当はわからない」

と。みんなそうです。身につかないものは真理ではない。本当に身につき、身から発するものです。さつき、聖歌を歌った時に、

「十字架のもとに荷をおろせば」

なんて呑気なことをいつている。あれは荷ではないよ、身をおろさなくてはいかん、からだをおろさなくては。私はあんなのを歌っている――癩しやくにもさわらないけれども――荷物を下ろしたってダメです、自分自身がキリストの荷物なんだから。自分自身をキリストの中に下ろさなかったら。あなた方は歌う時に本当にその境地に入って歌ってくださいよ。そうしたら、たとえ「荷」と書いてあったって、この荷は実は「身み」だという気持で歌わなくては。いつわりになる、浮いてしまうよ。「:であらん」なんてあったら、「:である」といつて歌う。しょっちゅう変えなくてたつていいけれども。だから、我々はやはり讃美歌をつくらなければダメだね。若い人たちはもう少し勇ましくやってくださいよ。

「よし、私はひとつ作ってやろう」

と。私から聞いて、ただ陶醉してもダメ。

「よし、これを原動力にして、私はやるぞ」

と、何かおつ始めなくては。共同作戦ですから、共同戦線ですからね。共同戦線で行く。それで、聖名の力が働きました、そしてパウロがあんしゅ按手した。私は皆さんの背中に手をお按く。ということとは、

「主さま、どうぞ、あなたの聖手をこの頭の上に按いてください」

という気持でやっている。見えざるキリストの聖手を頭に受けて、私はただお手伝いしているだけです。背中に、脊椎の上の方に手を按いてお手伝いしている。キリストを抜きにして如何なることもできません。祈る時にもし片手で祈るなら、こつち側にはキリストの手がきている。

「せきしゅ隻手の声」

と道元が言ったが、この隻手(片手)の声は、両手でパチンとやるよりもっと凄い声が響いているんです、こうやって片手に合わせるように、キリストの聖手が来れば。

私たちはみんな相対的存在です。その相対的な特殊な存在に絶対的なものを受けるときには、やはり相対的な表現の仕方しかできないけれども、しかし、それにおいてこの絶対なものを受けとっている。

キリストが「父よ」と仰るのは、いわゆる鬚の生えたお父さんではない。「父」という言葉において――暗号だから、「父」という言葉は――それでももの凄い、もう表現のできない実体者を信頼して、その中に自分をぶち込む。もう

「父よ！ アッバー！」



という一言でキリストはその中に入ってしまったっている。あとの祈りはどうだっていい。そうすると、

「天にまします我等の父よ云々」

なんて、教会でしょっちゅう空念仏をやっている——まあ悪口言ったらわるいけれども——教会員は、「もうまたか」なんて思っ、眠くなったりする。

「主の祈りは十字架にかかっている」

とルッターが言いました。

それで、パウロは按手したら、聖霊がその上に臨んだ。

「⁶パウロ手を彼らの上に按おぎしとき、聖霊その上に望みたれば、彼ら異言を語り、かつ預言せり。⁷この人々は凡て十二人ほどなり。」

これは素晴らしい異言ですよ、パウロの按手は。それから、驚くべきことが書いてある。

「¹¹而して神はパウロの手によりて尋常ならぬ能力ある業を行いたもう。¹²即ち人々かれの身より或は手拭あるいは前垂まえだれをとりて病める者に著くれば、病は去り悪霊は出でたり。」(使徒行伝19・2～12)

もうパウロの霊が物を通して展開しているわけです。手拭いがかまじわざをしたのではない。パウロの霊がただ伝わっただけのはなし。キリストの衣すその裾に触れたらば持病が治ってしまったなんて、福音書の中にもあるでしょ。

●聖霊の力が充滿している福音

私は「聖霊の力」なんて題したけれども、もうマタイ伝の1章から黙示録の最後までみんな聖霊の力がはたらいているんです。その業もその言葉も、そういう聖霊の充滿しているところの福音であるということに新しく気がついてください。絶対に意味の世界ではない。みんなみ霊の力がはたらいているところの言葉であり、業であるんです。だから、聖書にはかなわないんです。いわゆる人間の思想は、哲学であろうと芸術であろうと、かなわない。どんな哲学も人ひとりの魂を救うことができなかった。ところが、この聖書の一行が何人を救うかわからない。それだけもう質がちがう。だから、ケタ違いの本だ。今度は使徒行伝の16章を開いてください。占いの霊のやつがいて、そしてパウロがはたらきをした。そのことが16章16節から書いてある。

「¹⁶われら祈場いのりばに往く途中、卜筮うらなひの霊に憑つかれて卜筮をなし、其の主人らに多くの利を得さする婢女はしため、われらに遇う。¹⁷彼はパウロ及び我らの後に従いつつ叫びて言う『この人たちは至高いとき神の僕にて、汝らに救の道を教うる者なり』¹⁸幾日いくひも斯くするをパウロ憂いて、振反りふりかえその霊に言う『イエス・キリストの名によりて、汝にこの女より出でん事を命ず』霊ただちに出でたり。」

「聖名によりて命ず」と言っ、霊を出した。その霊出しというように私も私はかつてか



なり致しました。そういう霊があつたから。……（その実例の二話省略）……。とにかく、私みたいなおおよそ霊的な人間でない、霊的素質なんかないやつです。けれども私はバカ正直ですから、聖書の仰る通りに——「そんなことがありますか？」でなくて——

「はいっ、参りました！」

といて受けとつていくから、私は判らなくともキリストが働いてくださるわけです。

19 然るにこの女の主人ら利を得る望みのなくなりたるをみて、パウロとシラスとを捕え、市場に曳きて司たちに往き、²⁰之を上役らに出して言う『この人々はユダヤ人にて、我らの町を甚く騒がし、²¹我ら 로마人たる者の受くまじく行ふまじき習慣を伝うるなり』²²群衆も齊しく起り立ちたれば、上役ら命じて其の衣を褫ぎ、かつ笞にて打たしむ。²³多く打ちてのち獄に入れ、獄守に固く守るべきことを命ず。²⁴獄守この命令を受けて二人を奥の獄に入れ、桎にてその足を締め置きたり。²⁵夜半ごろパウロとシラスと祈りて神を讃美する。囚人ら聞きいたるに、²⁶俄に大なる地震おこりて牢舎の基ふるい動き、これはもう霊震ですよ、地震ではない。（戦後に松代地方の地震多発の話省略）。

その戸たちどころに皆ひらけ、凡ての囚人の縲綯とけたり。²⁷獄守、目さめ獄の戸の開けたるを見て、囚人にげ去れりと思い、刀を抜きて自殺せんとしたるに、²⁸パウロ大声に呼わりて言う『みずから害うな、我ら皆ここに在り』²⁹獄守、燈火を求め、駈け入りて戦きつつパウロとシラスとの前に平伏し、³⁰之を連れ出して言う『君たちよ、われ救われん為に何をなすべきか』³¹二人は言う『主イエスを信ぜよ、然らば汝も汝の家族も救われん』³²かくて神の言を獄守とその家に居る凡ての人々に語れり。

もうその言葉には力がありますから。

³³この夜、即時に獄守かれらを引取りて、その打傷を洗い、遂に己も己に属する者もみな直ちにバプテスマを受け、³⁴かつ二人を自宅に伴いて食事をそなえ、全家とともに神を信じて喜べり。」（使徒行伝16・16〜34）

獄守が家族と一緒に改心してしまった。ここでも人の思いをはるかに越えた聖霊の力がはたらいた。神様の福音は、キリストの福音は、自らの力で進んで行きます。

「もし、この輩が黙せば石が叫ぶ」

とキリストは言われた。もし、我々クリスチャンがみんなこの原始の使徒たちのような信仰を棄ててしまつて、

「もうキリスト教はダメだ」

と言つたら、

「石が叫ぶぞ」

とキリストは言う。また、



「アブラハムのすえを石より起こす」

と。皆さんは「活ける石」(リビングストーン)だよ。「活ける石」とはペテロもそういう言葉を使っている。我々は躓きの石、活ける石だ。

●十字架ですっ飛ばされて無になってしまう

コリント前書2章、

「兄弟よ、われ曩^{むかし}に汝らに到りしとき、神の証を伝うるに言と智慧との優れたるを用いざりき。²イエス・キリスト及びその十字架に釘^つけられ給いし事のほかは、汝らの中にありて何をも知るまじと心を定めたればなり。

それほどにまでパウロは十字架を土台にしました。そう言っておいて、パウロは何とそれから言うかというと、

³我なんじらと偕に居りし時に、弱くかつ懼^{おそ}れ、甚^{いた}く戦^{おの}けり。⁴わが談話も、宣教も、智慧の美しき言によらずして、御霊と能力^{ちから}との証明によりたり。

⁵これ汝らの信仰の、人の智慧によらず、神の能力に頼^よらん為なり。」(コリ

ト前2・1〜5)

人間パウロは弱く、恐れ戦くような者です。けれども、この人間パウロの奥にみ霊の、霊人パウロがある。これがいわゆる美^{うる}わしき言でも智慧でもない、み霊と力で――ロマ書15章、テサロニケ前書1章、テモテ後書1章にも書いてあります――この「御霊と能力」という。「力の御霊」で結構です。聖霊は力を有っている。その力は倒す力ではない。相手を救いあげる力。サタンはやつつけます。けれども、人はこれを救いあげる力、敵をも愛する力、敵をも荷^{にな}いあげる力です。

「敵を愛せよ」

というのは、

「敵を荷いあげてしまえ」

ということ。ギリシア神話にアトラスが地球を担^かいでいるような話がありますが、あのアトラスのような。またクリストフォロスのように少年を担いで川を渡ろうとしたら段々重くなる。しかし重くなるにつれてまた力が出てきた。その担いだ少年がキリストであったという伝説です。何かしらんけれども、皆さんはこの御霊の世界の生命に入って、この御霊をいただいて宿していると、何をしていても創造的な力も出てくるし、耐え忍ぶ力も出てくるし、智慧の力も出てくるし、なんとも言いようがないです。相手を本当に救いあげる愛の力。愛は最大の力です。だから、コリント前書13章の、「愛は……」というのはみんな、

「御霊の愛は……」

といって読まなくては。「御霊の愛」でなくて、あの愛は意味をなさない。

「凡^{おおよ}そこと望みぬき、おおよそこと信じぬき、おおよそこと耐え抜く」



というのは、これは聖霊の愛です。

「⁶されど我らは成人したる者の中にて智慧を語る。これ此の世の智慧にあらず、又この世の廃^{すた}らんとする司^{つかさ}たちの智慧にあらず、⁷我らは奥義を解きて神の智慧を語る、

隠れたる智慧だと。そして10節、

¹⁰されど我らには神これを御霊によりて顕し給えり。御霊はすべての事を究め、神の深き所まで究むればなり。……¹⁴性^{うまれつき}来のままなる人は神の御霊のこ^{おろか}とを受けず、彼には愚^{おろか}なる者と見ゆればなり。また之を悟ること能わず、御霊のことは霊によりて弁^{わきま}うべき者なるが故なり。」(コリント前2・6～14)

と。だから、聖霊を受けるまでは実は、いくら聞いても聞こえない。いくら見ても見えない、ということでもあります。

これはどうしても、生まれつきの自分というものが片づかなければダメです。

「ああ、『片づける』とは困ったな。『己を棄てろ、己に勝て』とは困ったな」

なんて。出来ませんよ、「己を棄てろ、己に勝て」なんて言っただって。本当に己に勝った人がいますか。キリストの他にいない。

「義人なし、一人だになし」

という。ある程度はいきますよ、ある程度は。だけれどもそれはまだ本ものではない。それがもう何といつても、仏教とまたちがうんです。もう私は何回言ってもしょうがない。

十字架の受けとり方は限りなく深くなる。限りなく深くなっていくと、限りなく聖霊の世界が高くなる、深くなる、強くなる、厚くなる。そういうことです。正に正比例している。

「十字架、十字架」

と言いながら、聖霊が全然出てこないところの十字架がたくさんあるね。

ところが、十字架ですつ飛ばされていいることが本当なら、無になつてしまう。自分が無くなつてしまう。ウワーツとこの御霊の世界の力がきて、もう熱くてしょうがない。

もう、秘訣はただこれだけなんです。こんなありがたい、申し訳ない、ありがたいものはないんですよ、十字架というのは。

「どうも、私はまだ魂が清くありませんで、もつと清まりたいです」

なんて、いわゆる「清め派」はそんなことばかり言う。なぜ相対的なことを計算し測ろうとするか。キリストの清さというのは熱いんです。相手を活かすものです。

「いと聖なるものは謙つている者の中に入ってきて、これを活かす」

と書いてある。イザヤ書57章15節です。

●神・キリスト・我の三重の内接円

コリント前書3章16節、



「¹⁶汝ら知らずや、汝らは神の宮にして、神の御霊なんじらの中に住み給うを。」
(コリント前3・16)

パウロは「神の御霊」と言いました。けれども、これは「キリストの御霊」と言つて一向差し支えない。これをただ「神の、神の」と言つていけると、いわゆる直接的な神秘主義になつたらダメだよ。中世の神秘家たちがそれをやった。キリストぬきにパウロは「神」と言っているのではない。パウロが「神」と言うときには、キリストぬきの神さまはパウロには意味がない。神さまはキリストをもつてパウロを救つた。「神さま!」と言うときには、もうキリストはその中に入っている。

いつも私が書くように三重の内接円です、これは一筆書きで描く。この中の小さい円は私たち一人ひとり。それを囲んでいる中位の円はキリスト、それをまた囲んでいる外側の大きい円は神。こういう三重の関係を形成してくれるものは聖霊です。この大きな円の中に入れるのは、ここに十字架という門があるから、キリストの中に入っていける。

「はばかりずしてその至聖所に入る」

と、ヘブル書の中に書いてある。

「汝らは神の宮にして、キリストの御霊なんじらの中に住み給う」

という。御霊の住みたもうところに本当の生命がある。

そしてまた、パウロは面白いことを言う。コリント前書4章13節、

「¹³識^{そし}らるるときは勸^{すすめ}をなせり。我らは今に至るまで世の塵芥^{あか}のごとく、万^{よろず}の

物の垢^{あか}のごとくせられたり。」(コリント前4・13)

と。諍^{そし}られるとき、責められるとき、罵^{ののし}られるとき、

「我らは今に至るまで世の塵芥^{あか}のごとく、万^{よろず}の物の垢^{あか}のごとくせられたり」

という。私は自分のことを「塵芥生」なんて書いたことがある。この塵芥のごときものに光がかかってくると、塵が光る。私たちは光る塵なんだ。それから、天界に虹がかかる。水滴は無色透明の無者であるときに、太陽の光を受けて七色に、いや無限色に反映する。

皆さんは一人ひとりがつびきならない光を放つんです、無者となると。その人はその人らしい光を放つ、無者となると。

「無者となる」

というと、なにかみんな同じ色になるか。そうじゃない。無者となると、神さまは一人びとりを天下一品につくっているんですからね。人格というのは、天下一品の一個体。個というのは他のものと比較することのできない個が本当の人格体という。それはその人でなければ表すことのできないものが、御霊において現れてくる。それが中心になって、その人の中でまた自在にいろんなことに変光もしますよ、光が変わることもありますよ。けれども、その人の持ち前の光というものがある。ありがたいです。それだから、それが大調和をなして、百花繚乱として自然界は美わしい。それがみんなバラだったり、みんなユリ



だったり、みんなナデシコだったらどうにもならん。ナデシコがユリに向かって、

「お前はナデシコになれ」

なんて、どのナデシコも言ったことがない。みんなそれぞれ黙って神の栄光を表して、おのずから調和をなしている。

まあ人間だけだね、本当にバカなのは。それぞれ、人真似なんかひとつもいらん。いわゆる類型的な必要はない。けれども、そこに本当に本当の人間性というものが、神様の霊止^{ひと}、霊が止まると、それぞれお互いに尊重しながら、大きな調和をなす、大きなハーモニーとなる。平和であり歓喜となる。

そんなことは分かり切った真理なんです。国際関係もその通り。それぞれのイデオロギーでいいよ。しかし、イデオロギーを超えた世界をもたなければ、本当にイデオロギーをもつ資格がないんです、本当は。ソ連人であろうと、中国人であろうと、何であろうとみんな本当の意味で握手ができる。

どういうことをしていても、一番根源において神の人、キリストの人になれば、それが本当の、人を動かすところのことになっていく。皆さん一人ひとりそうですよ。

聖霊の器になることほど、楽しいことはないし、また本当に神の栄光を現すことはない。第二の宗教改革は、我々一人びとりが本当に、パウロさん、ペテロさん、ヨハネさんと本当に天界の使徒たちと友達の如くにして歩いて行かなければダメです。

「パウロは偉かった」

なんて、そんなことを思う必要はない。

「パウロ何ものぞ、アポロ何ものぞ。キリストだけだ」

と彼は言っている。

●聖霊という種が私の中に深い根を張る

コリント前書12章にいきますと、

「⁴賜物^{たまものこと}は殊なれども、御霊は同じ。⁵務^{つとめ}は殊なれども、主は同じ。⁶活動^{はたらき}は

殊なれども、凡ての人のうちに凡ての活動を為したもう神は同じ。」(コリント

前12・5・6)

霊の賜物のことが書いてあって、

「聖霊は一つだが、御霊は同じだが、賜物はいろいろだ。主は一つ、神は一つ、

聖霊は一つ。神・キリスト・聖霊はただ一つであるが、それを受けとったと

ころの事態にはいろいろなことが展開してくる」

ということが――いちいち読みませんが――8節あたりからずーっと書いてある。そしてまた、彼は人体に譬えて言ってます、13節から。

パウロという人は本当に素晴らしい構造をもったひとです。このコリント前書12章のこ



とは、国際関係であつても、社会の事態においても、これでいけば本当の世界にいくんです。政治でも経済でも何でもみんな実は、この福音のもとを一人びとりがそこを持てば——なにも、宗教と文明とをただ直結するのではない。宗教は次元がちがうんだから——次元のちがった深いものを持てば、それがその政治的な知識や、経済的な知識や、それぞれ専門に勉強して一向さしつかえない。けれども、それを活用するものは人ですから。活用する人がこの福音を有^もつていなければ、本当の活用ができない。みんなとらわれてしまう。そして、観念に躍るようなことになる。これが全部、まちがいのもと。もうはつきりしている。そういうことをもつと書かなくてはならないと思っているんだ、正直。

それで、パウロは14章で異言の賜物のことも書いてます。パウロというひとは実に多面的です。たとえば、

「¹⁵然らば如何にすべきか、我は霊をもて祈り、また心をもて祈らん。我は霊をもて謳^{うた}い、また心をもて謳^{うた}わん。」(コリント前14・15)

なんて書いてある。パウロという人がどうしてこんなに自在であるかというところ、本当に聖霊の世界に入つて、自分がなくなるとその自在性が出てくる。皆さんのものごとに対する判断の仕方や、それに対する力の作用の仕方は、これは深く入れば入るほど、

「キリストの霊がなんと素晴らしい事態であるかな」

ということが段々体験していかれます。ぜひとも。

ヨハネ書簡に

「神の種(スperlマ)」

という言葉がありましたね。この「種」は聖霊のことです。種だから、聖霊はまず根を張らなくてはいいかん。そうして芽が出てくる。聖霊という種が私たちの存在の中に深い根を張った。根を張った聖霊なんだ——妙な言い方をするけれどもさ——それが本当の常住の聖霊になる。もはや「十字架」と言わなくても、十字架が深層意識の中に来てしまっている。深層意識の中に来てしまつて、もう自分が問題でないことになってしまっている。そうすると、根を張った聖霊のようなことになります。こういうことが来ても——揺れますよ、人間だから——揺れても、ダルマみたいに、決してこれは引っくり返つてしまわない。それから磁石のように必ず北を指すんです、キリストを。人間ですから、いろいろ揺れるよ。けれども必ず北を指す、このようにして聖霊が内住してくるとね。

聖霊の内住はどうするんですか。祈りです。呼吸しているように、魂が呼吸している。魂がキリストの霊を呼吸している世界。祈りの世界、祈りどころ、祈りだましい。祈り魂になる。祈り魂になると、聖霊が内住の根を張るような事態になる。別な言葉でいうと、錆び付いたようなことになる。

それまでは、まあお互いに若い人たちは

「ワッショイ、ワッショイ」



と祈祷会やっただけでわるくはないよ。けれども、「ワッショイ、ワッショイ」だけではダメです。祈祷会でもって「ワッショイ、ワッショイ」で、

「またワッショイワッショイの祈祷会をしたいな、毎週水曜が楽しみだ」

なんて、ダメですよ。なにも私は祈祷会をけなしているのではない。それはいいよワッショイの水曜の晩が今度は、毎日の晩に根を張るようなことになってくれば、それが今度には自在な祈祷会になってきます。そして日常の生活にそれがいろんなことに働く。そうでなかったら、「聖霊」なんて言っただけでつまらないです。毎日いろんなことに働いていく。

それはパウロさんだつてそうなんだ、ヨハネさんだつて。まあ何といったつて、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネのキリスト。この福音書のキリストの一切の在り方を見てください。どうしてキリストの聖言の次元がちがうんですか。頭ではない。これは本当に御霊でもってそこから迸り出たところの聖言だから。何でもない、みんなにわかるようなことを言いながら、実はそれは本当に深いところから来ている。その深みが見えないんです、この御霊をいただかないと。そしてまた、非常に烈しいことを仰つて、どれにも及第できない。へたすると躓く、その表現に。

けれども、聖霊の世界に入ると、それが実はその烈しさが逆に私たちに本当の力となる。だから、福音なんです。聖霊を受けなかったら、キリストの言はやり切れないです、福音どころのさわぎではない。みんな落第するから。落第するような言葉を仰りながら、これが私たちに力となるのは、それは御霊がくると、キリストの言葉が読めてくるというのか、つかめてくるから、力となる。だから、

「もはや、人がこれを説明することを要しない」

と、ヨハネ書簡に書いてある。そして、一番いい集会は、本当に聖書を身読しながら、身読しながらそれが直ちに祈りであるような――さきほどお二人の司会者が読んでくださったような角度でもって読んでみると、読んでいるだけで、もう祈りの世界に入ってしまう。聞いているだけでどんどん聖霊が来てしまう。集会はおしまい。一番いいな、それが。私有余計なことを言う必要はない。本当ですよ。だから、あなた方、聖書の輪読なんて、いいですか、習慣でやるのではなくて、読むことが直ちに祈りであるような読み方の輪読をしてもらなさい。それが本当の祈祷会だから。

「よし、それならやりましょう」

と、おっぱじめてくださいよ。そうすると、

「なるほどこれは違ってきた」

ということになる。そのかわり、浮いた読み方をしたら、ピタッとやめなくてはいいかん。いつわりになるから。魂こめて祈り心で読んでいく。そしてお互いにその相手の読むのを心の中で祈り助けるようなわけで、集会をしてもらなさい。そうしたらもう、

「二三人、わが名の中において身読するところに我はあるなり。御霊をもつ」



て在るなり」

ということです。それくらいのカリスマに我々はならなくては。もう今までの概念を突き破って行きなさいよ。「何かすごいな、あいつらは」なんて。そうだよ。

「神のためには狂えるなり」

というようなものです。

●第二の宗教改革を承っている一人びとり

ペテロ前書4章、

「¹²愛する者よ、汝らを試みんとて来れる火のごとき試煉を異なる事として怪しまず、¹³反^{かえ}つてキリストの苦難^{くるしみ}に与^{あずか}れば、与るほど喜べ、なんじら彼の栄光の顯れん時にも喜び樂しまん為なり。¹⁴もし汝等キリストの名のために謗^{そし}られなば幸福^{さいわい}なり。栄光の御霊すなわち神の御霊なんじらの上に留^{とど}り給えはなり。」(ペテロ前4・12、14)

これは本当に勝利の言葉です。キリストの御霊、神の御霊は私たちの中に止まって、^{ひと}靈止^ととなっている。その時には、艱難はいくらでもやってこい。かえって嬉しくてしょうがないと。艱難が来ればくるほど力が働くからです、聖霊がはたらく。

「艱難汝を玉にす」

なんていう言葉が昔あったよ。艱難汝を聖霊の火の玉にするという。

まあね、私みたいな、70歳を越えて「74歳」やつとこんなところへ来たようなバカ者でないようになつてほしいよ、あなた方は。もつと早いところで。もう世は末だからね。

「まあ、70位まで待つていましょう」

なんて、ダメだよそれでは。もう世の中は引っくり返つてしまうから。早いうちに。もうあと22年で20世紀はおしまいだ。あと22年かどうかということがありますかね、これが。日本の姿はあぶないね。もういわゆる教育でもダメ。明治維新の志士たち、彼らの気魄に負けないところの聖霊の器が出てこなくては。それはあなた方がやる。一人びとり、「第二の宗教改革」を。現象面はどうでもいいよ。質において第二の宗教改革を承っている一人びとりになつてください。そうして、何十日でも祈つてごらん、自分のあることを。「自分の」というのは、自分に係わることですよ。象山が言つたように、

「二十を越えれば一国に、二十を越えれば天下に、四十を越えれば五世界に繋^かる」

(余^よ、年二十以後、乃^{すなわ}ち匹夫^{ひとびと}にして一国に繋^かることあるを知る。三十以後、乃ち天下に繋^かることを知る。四十以後、乃ち五世界に繋^かることを知る。)

ということ、聖霊の人が本当に自覚するところです。係わりがある。女の方であつても、本当にそのような祈りの世界。神さまは、その人が知らないうちに何かなさる。法然とか、親鸞とか、道元とか、日蓮とか、あの一流の坊さんたちは仏教の世界でそういうような魂



だったんです。キリスト教界にはまだそういうすごいのが出てこない。ハドソン・テラーなんていう人は本当に祈りの人でした、あのシナ伝道のすごさは。ザビエルという人もそうです。

「カトリックだ。いや、プロテスタントだ」

ではないです。神の人ザビエルです。器の大小はどうでもいい。質の問題なんです。原子力的な小さなものが逆比例しても凄いい力をもつ。本当ですよ。自分の祈りの力ではない。本願の力なんです。聖霊の祈りの力なんです。まちがえないでくださいよ。

「まだ、私は祈りの熱心が足りない」

なんて、そんなことではくたびれてしまう。何といひかね、本当に私は無いんです。そうすると、ものすごいものが来るんですよ、上から。本願の祈りの力なんです。祈りが、聖霊の祈りが、この我々の中でこの五体を駆けめぐり、また爆発していくんです。もうあなたの方の中で何か今、肉体的に少しおかしな人はみな治っているはずですよ。全身で受けとっていれば、もう治っているんです。全存在で。主さまは、この全的な人を喜びたもう、全的でぶつかって行く者を。あの福音書でもってキリストにぶつかって、キリストが飲ばれるのはみんな全的なひとです。それが姦淫の女であろうと、何であろうと、みんなそうです。ところが、己を立てているようなやつはみんなダメ。もうはつきりしている。

まあこの秘訣は、説明できないですね、正直。しょうがないよ、私は誤解されても。「無者」なんて言っているけれども……

●毎日聖書を読んで聖霊の力を受けては進んで行く

コリント後書3章17節、

「¹⁷主は即ち御霊なり、主の御霊のある所には自由あり。

自由自在であると。その自由自在は、天の法則なんです。天の法則に従っている。霊法なんです。「自由あり」というのは

「御霊のある所には霊法あり」

ということですよ。それと「自由あり」と同じことですよ、間違えないでください。「自由」なんていうとすぐ人間的な自由だと思つて、とんでもない。ひとつも自由なんてわかってないんだ、一般の人がいう自由なんてものは。民主主義の自由なんてものは全然ダメ。もうそういう次元のものがたくさんいるんだからね。皆さんはエライところに来ているんですからね、正直。

¹⁸我等はみな面帔かおおおいなくして、鏡に映るごとく主の栄光を見、栄光より栄光に

すすみ、主たる御霊によりて主と同じ像かたちに化するなり。」(コリント後3:17、

18)

「主たる御霊にあつて主と同じ像に化するのである」と。



「この故に我ら^{あわれみ}憐憫を蒙りて此の職^{つとめ}を受けたれば……⁴この世の神は此等の不信者の心を暗^{くら}まして、神の像^{かたち}なるキリストの栄光の福音の光を照さざらしめたり。

そういう妨げをしやがった。

⁵我らは己の事を宣^のべず、ただキリスト・イエスの主たる事と、我らがイエスのために汝らの僕たる事とを宣^のぶ。

キリストが私たちの主で、私たちはまたみんなの僕である。僕なる者が本当の自由を持っている。これは、このへんのところをマルチン・ルターが題材にして「クリスチャンの自由」というものを書いた。僕というのはキリストの霊が来ているから、人を愛して、人を助けて、人を荷^おつていくのを僕というんです。それが自主なる者です。僕であるということと、自主的な行動であるということは一つなんです。間違えないでください。卑屈な意味でもって僕^{しもべ}・婢女^{はしため}なんて言っているのではない。

⁶光、暗^{やみ}より照り出でよと宣^{のたま}いし神は、イエス・キリストの顔にある神の栄光を知る知識を輝かしめんために、我らの心を照し給えるなり。⁷我等この（キリストという）宝を（この）土の器に有^もてり、これ優^{すぐ}れて大なる能力の我等より出でずして、神より（キリストより）出づることの顕^あれんためなり。⁸われら四方より患難^{なやみ}を受くれども窮^{きゆう}せず、為^なん方つくれども希望^{のぞみ}を失わず、⁹責めらるれども棄てられず、倒さるれども亡びず、¹⁰常にイエスの（十字架の）死を我らの身に負う。これイエスの（復活の）生命の我らの身に（御霊において）あらわれん為なり。」（コリント後4・1〜10）

パウロさんの言葉の欠けたるのを私は補いながら今、読んだんです。もうこういうところを読むだけで、皆さんが輪読するだけで、それでもう、

「ああ、アーメン、ハレルヤ！ 力を得ました」

と言つて進んで行く。また、毎日お読みになる時にそのようにして力を受けては進んで行く。「なるほど聖書というものはそういうものだ」

と。そうでなかったら、もう本を閉じた方がいい。そういうような気魄でもって第二の宗教改革を本当にやらざるを得ない。もうそうでなかったらどうにもならんという、その終末的な今、世であることを歴史的な、本当の神の歴史の自覚をもつて私たちは進んで行きたいです。

「小さき群^{ぐん}よ、神の国^{たま}を賜^{たま}うはわが意^{こころ}である」
と、キリストは。

コリント後書の11章を見ると、パウロの艱難がこんなにあるではないですか。どうしてこんな艱難を彼は突破できたんですか。聖霊の力のほか何ものでもない。畳みかけて彼はここに言っている。已む得ずして彼は語っている。



「²³彼らキリストの役者^{えきしや}なるか、われ狂える如く言う、我はなお勝^{まさ}れり。わが
労は更におおく、獄^{ひとや}に入れられしこと更に多く……

と、パウロは狂えるごとくバカのように言っている。

²⁹誰か弱りて我弱らざらんや、誰か躓きて我燃えざらんや。³⁰もし誇るべくは、

我が弱き所につきて誇らん。」(コリント後11・23～30)

ただキリストだけを誇ると。13章8節、

「⁸我らは真理^{まこと}に逆^{さか}いて能力^{ちから}なく、真理のためには能力あり。」(コリント後
13・8)

真理の実体キリストのためには、御霊にあつて力がありますよと。

まあ読んでいけば切りがないから止めますけれども、聖霊の力がこの聖言の背後に、いや聖言の中にも動いているということをお忘れなくください。そうしたらもう、福音書の読み方も、新約聖書の読み方もガラリ変わってきて、

「いやあ、何かしらんけれども、聖書はもう本当に大変な本だ」

と、私はただそのことを皆さんにお薦めしたいだけです。おわります。

● 祈り

熱き御愛の主さま。ここに集まっている、また先に帰った、また来ようとして来れなかった、また遠くドイツにあつてこの日を覚えてやまない奥田先生の祈り、それがみなあなたが一つにして、そして、あなたはまたその一人びとりのつびきならない御顧みをもつて、覚えてくださり、また助けてくださり、また導いてくださり、また鍛えてくださるから、感謝であります。私たちはあなたに使命づけられた者です。あなたが御霊をもつて私たちをその使命の裏付けをしてくださるから感謝であります。

この聖霊がどのように使徒たちを動かしていたか、そのことをいよいよ私たち一人びとりが身読して、そして、パウロさん、ヨハネさん、ペテロさん、ヤコブさんと、天界に驚くべき万軍と共に、神さま、私たちは進んで参ります。どうぞ、そのようにして、あなたの終末の黙示録に啓示されているところの、偉大なあなたの最後のときを待ち望みつつ、勇みつつ、歌いつつ歩んで参ります。

そして、かくして本当にこの希望なき世に本当の希望を与え、愛なき世に本当の愛を示し、光なき世に本当の光を照らし、そのような器として一人びとりを十全にお鍛えくださらんことを切に願ひ奉ります。人生の目的ははつきりました。本当に第二の宗教改革は——なにも言葉で言う必要はありません——私たち自身が本当にそれを実証していくことができますように……(異言)……。平伏して聖名を讃え奉ります。アーメン。

